

# 「定住している中国帰国者の日本語学習ニーズ等」についての調査報告 - その2：呼び寄せ家族の場合

安場 淳 平城真規子 馬場尚子

## 1. はじめに

本稿は、1996年に行った、所沢の中国帰国者定着促進センター(以下、所沢センター)修了生に対する日本語学習ニーズ等についての調査報告と同時に行われた修了生の呼び寄せ家族に対するニーズ調査の報告である。調査の目的および方法、用語の規定等については、紀要第5号「『定住している中国帰国者<sup>1)</sup>の日本語学習ニーズ等』についての調査報告 - その1」(安場他、1997)を参照されたい。

ここでいう「呼び寄せ家族」とは、国費帰国した中国残留邦人の日本定住後に永住目的で呼び寄せられて来日した家族を指す。呼び寄せ家族は先に帰国した親や本人の負担による自費来日であり、定着促進センター入所など、国費で帰国した人が受けられる様々な援護施策の対象とならない場合が多い。自費帰国の邦人とその家族については、来日直後の住居の確保、日本語学習の機会保障など、サバイバルレベルからの困難がより多いことは従来から指摘されている。

今回の調査は、所沢センター修了生とその呼び寄せ家族に回答を依頼したものである。これらの国費帰国した中国残留邦人とその呼び寄せ家族の他にも、自費帰国の残留邦人がおり、援護施策上の格差が問題となっているが、今回は調査対象としない。

今回の調査の目的を以下に掲げておく。

日本への定住のために来日した呼び寄せ家族の

- ・日本語を主とする学習のニーズ
- ・学習ニーズに関わる生活と学習の実態
- ・日本社会に対する要求

の傾向を把握し、将来的な生涯学習支援システム作りの基礎資料とする

## 2. 調査対象者と方法

方法は修了生対象の調査と同じく、質問紙を郵送する方法をとった。対象とすべき修了生の呼び寄せ家族については、所沢センターではその実数を把握していない。そこで、修了生の家長宛てに余分に調査票(紀要第5号の資料参照)を郵送し、可能であれば呼び寄せ家族に手渡しして回答と返送を依頼することとした。この方法では、調査に協力してくれた孤児本人の呼び寄せ家族が多ければ、その一族からの回答が多くなり、回答の傾向に偏りが生ずることになるが、これはやむを得ないこととみなした。また、面接調査に赴いた際にその世帯に呼び寄せ家族がいれば、調査票を手渡しして記入してもらうこととした。

なお、質問紙法では対象者の識字力が問題になるが、呼び寄せ家族の識字力も所沢センターでは把握していない。そこで、回答中の学歴についての記述から識字力を判断することとした。

修了生対象の調査では滞日2年以上の人を対象としたが、呼び寄せ家族の場合、来日直後から日本の生活に突入せざるを得ない人が多いと考えられるため、滞日0-2年の人も対象とした。

## 3. 調査結果と考察

### 3-1. 回収状況と回答者のデモグラフィックな属性

修了生300世帯に調査票を送付し、78件(修了生38世帯から)の呼び寄せ家族からの回答を得た。今回の調査は 教育機関在籍者と (半)非識字者とみなされる小学校中退者(自己記述であるので信頼性に問題はあるが)を対象外としていたが、該当者は含まれていなかったため、78件全員の回答を有効とした。単純計算をするなら、300世帯中の38世帯からの回答であるから、世帯別の回収率は1割強(12.7%)である。

年齢層では、20-30代がほとんどを占めるが、これは、この年齢層の人たちを親である孤児世代が同伴して帰国できない制度からくる当然の結果だろう<sup>2)</sup>。なお、滞日年数を修了生と同じようにグループ化してみると、0-2年のグループからの回答が最も多い(表2)。修了生世帯ごとの呼び寄せ家族数が把握されていないた

<sup>1)</sup>中国帰国者(略称：帰国者)とは、日中国交回復後に帰国した中国残留邦人とその同伴家族およびその呼び寄せ家族を指す。

<sup>2)</sup>

め、正確な回収率は算出できないが、大雑把に考えると、滞日年数が10年を超える修了生の場合、帰国当時の孤児本人の平均年齢も40代前半と若く、二世を全員同伴して帰国していた率が高い。このため、呼び寄せと言っても、ずっと後になって来日当時未婚だった二世の配偶者として一人来日した者になるから、絶対数は少なくなると考えられる。

表1 性別年齢層別の回収状況

	20代	30代	40代	計
未記	2	0	0	2
男性	16	23	2	41
女性	18	17	0	35
	36	40	2	78

表2 親/本人の滞日年数別の回収状況

親/本人	本人7-10年	4-7年	2-4年	0-2年	件数
親10年-	0	0	1	1	2
親7-10年	2	5	2	1	10
親4-7年	0	12	13	9	34
親2-4年	0	6	1	25	32
合計数	2	23	17	36	78

孤児世帯は日本に定住後2-3年経って落ち着いた後に家族を呼び寄せる場合が多い。このため、呼び寄せ家族本人の滞日年数は親世代である孤児世帯の滞日年数より2-3年ほど短くなる傾向があると言える。今回の調査の回収状況も、この傾向を反映していると考えられる。たとえば、滞日0-2年のグループでは、親世代は滞日2-4年である場合が70%近くを占め、滞日2-4年のグループの中では親世代が滞日4-7年である場合が約76%となっている。

ただし、回収率については、これだけではなく、日本語学習ニーズ等、支援を求めている緊急度が大きな要因となっていると考えられる。つまり、滞日0-2年のグループにとっては、生活のすべての面においてニーズの緊急度が高いことが予想され、そのことを訴える媒体としてこの調査に協力した人が少なくなかったのではないだろうか。所沢センター第43期生の呼び寄せ家族からの回答が最も多かったことにもそれが現れているように見える。第43期の修了生は調査時点で滞日2年ほどであり、呼び寄せた家族が来日間もない時期である。

もう一つ回収率に与る要素として世帯差がある。調査票送付時点で懸念されていた家族による偏りをみるために、修了生の同一世帯内の回答者をみたのが表3と表4である。

表3 親世代の滞日年数グループ別の回答者の人数/世帯数

親世代滞日	2-4年	4-7年	7-10年	10年-	合計
人/世帯数	32人/13世帯	34人/18世帯	10人/6世帯	2人/2世帯	78人/39世帯
1世帯人数	平均2.46人	平均1.88人	平均1.66人	平均1人	平均2人/世帯

全体を平均すると、1世帯から2人の回答が得られたことになる。しかし、親世代が滞日2-4年のグループの呼び寄せ家族は1世帯あたり平均2.46人と多い。最も回答者の多い世帯もこのグループに属し、1世帯から6人回答を得ている。所沢センターの学期でみると、第43期生(滞日2-4年グループに属する)の呼び寄せ家族の回答者が最も多く(19人)、同一世帯が5人、5人、3人である(表3)。

同一世帯は識字力が近くなる場合が多く、回答を寄せてくれやすい世帯とそうでない世帯とに分かれることが予想される。実際、回答者の学歴は、自己記述ではあるが修了生のそれと比べても、また中国の進学率からみてもかなり高い(表5)。裏返せば、その分日本語学習ニーズが高い人が多いとも言えるかもしれない。

表4 同一世帯からの回答人数3人以上の世帯数

親滞日/人	3人	4人	5人	6人	合計
2-4年	1	0	2	1	4
4-7年	0	3	0	0	3
7-10年	0	1	0	0	1
10年-	0	0	0	0	0
	1	4	2	1	8

表5 回答者の中国での学歴

~卒	小卒	中卒	高/中専卒	大卒	未記入
人数	1	21	39	16	1

これらのことから、今回の調査結果は呼び寄せ家族の全体的なニーズの傾向を反映したのではなく、修了生からの回答にも増して、特にニーズの高かった人または特に所沢センターの実施する調査に協力的な家長を戴く世帯からの回答であるという前提でみていくべきものだろう。

居住地域でみると、大都市圏在住者は28件16世帯であり、非大都市圏からの回答との比率は大都市圏1:非大都市圏1.8であった。これは調査票送付時の比率とほぼ符合する。

### 3-2. 生活の状況

本節では就職状況、生活全般への満足度と不満を感じる領域について報告する。

#### 3-2-1. 職業

何らかの形で職業についていると回答した人は58人(表6、74.5%)だった。日本社会への参入のための準備期間にあるとみなせる人たち9人(日本語学校に在学中の5人、職業訓練校に在学中の2人、日本語学校の学習期間を終了後、半年未満の2人)を除いた人全体69人中の有職率は84.1%となり、修了生の回答と比べるとかなり高い。この外の無職の人のほとんどは「主婦」(8人)と答えた人である。

有職者の職種は、工場勤務が31人と圧倒的に多く、土木工事がこれについて6人、建設、清掃、ウェ이터・ウェイトレスが各3人、荷造り工2人、コック、美容師、電気工事、外交員、事務、専門職、講師、エンジニアが各1人である。学歴の高さを考えると、職業上の自己実現が難しい環境にある人が多いのではないだろうか。

表6 回答者の有職率

	0-2年	2-4年	4-7年	7-10年	計
職	25/36	16/17	16/23	1/2	58/78
%	69.4	94.1	69.6	//////	74.5

#### 3-2-2. 生活の不満・不安

生活全般に対する満足度評定の結果をみてみよう(表7)。5段階尺度での全体平均値は2.67であった。滞日年数による大きな違いはみられない。修了生の回答平均値よりはどのグループも満足度は低いが、不満を感じている人たちだからこそ回答を寄せたためと考えるべきだろう。

表7 生活全般の満足度の滞日年数・年齢層別の平均値  
(/は5人に満たないため、省略したグループ、//は対象者がもともと0のグループ)

/年齢層	7-10年	4-7年	2-4年	0-2年	全体
平均値	2と3	3.09	3.0	2.74	3.09
最頻値(人数)	/	2(8人)	3(7人)	3(15人)	3(27人)
修了生平均値	3.70	3.43	3.09	//	3.49

分野ごとにみると、回答者全体で最も多かったのが「日本語の習得状況」(30人)

であった(表8)。選択者は滞日年数を問わず多いが、これは日本語学習ニーズがあるからこそ、何がしかの期待を持って回答を寄せた人たちだと考えた方が妥当だろう。ただし、やはり0-2年グループでこの項目を選択した人の数は回答者の半数に及ぶことから、来日直後の人たちのニーズの緊急性が窺われる。

表8 生活全般の不満・不安を感じる領域(回答の多い順、...はグループ毎の順位)

項目名/滞日年数	7-10年	4-7年	2-4年	0-2年	合計	%
1.日本語の習得状況	1/2	7/23	6/17	18/36	30	38.5
2.子供の教育	0	5/23	6/17	7/36	18	23.1
3.自分および家族の将来の生活設計	0	6/23	6/17	5/36	17	21.8
4.住居(例:居住条件や地域の環境等)	1	4/23	3/17	8/36	16	20.5
5.生活上の安全(例:自然災害や交通災害)	2	5/23	0	6/36	13	16.7
6.仕事の内容	0	3/23	0	7/36	10	12.8
7.仕事探し	0	3/23	0	6/36	9	11.5
8.健康問題	1	3/23	0	3/36	7	9.0
9.余暇娯楽(含:趣味を楽しめない)、	0	3/23	0	3/36	6	7.7
10.進学	0	0	1	3/36	4	5.1
11.生活費	0	4/23	0	0	4	5.1
12.日本の生活習慣やマナー	0	3/23	0	1	4	5.1
13.家族の呼び寄せ	0	1	1	0	2	2.6

2番めに多いのは「子どもの教育」であるが、回答者の年齢層からこれは当然だろう。

滞日年数による違いが現れているのは「将来の生活設計」で、2-4、4-7年グループではそれぞれ1、2位であるが、0-2年グループでは7位である。0-2年グループでは、やはり、とにかく目前の生活の困難を乗り越えることで精一杯であるためと推測される。また、0-2年グループには修了生の配偶者として来日した人が含まれているが、その場合、当初の1年ほどは子どもも生まれておらず、将来の生活設計が緊急の課題としては意識されにくい可能性もある。

「住居」は逆に、滞日年数の少ないグループに不満な人の率が高い。呼び寄せ家

族の場合、公営住宅に別世帯としてすぐ入居することが難しいため、当座は親世代と同居または民間の家賃の安いアパートに入居となる。しかし、ちなみに住居に不満と答えた人たちが同居している人数の平均は2.44人、不満でない人のそれは2.58人であることから、同居人数の問題ではなさそうである。

「仕事内容」への不満は滞日年数の少ないグループで訴えている率が高い。中国での職業と比べて条件のよくない仕事につかざるを得ない来日直後の不満の現れだろう。また、日本式の仕事のやり方自体に馴染めていないことからの不満である可能性もある。滞日年数の多い人たちの不満が少ない理由が、条件のよい仕事につけるようになったためか、悪条件に甘んじてしまっているためか、あるいは仕事に慣れたためかは調査結果だけでは確認できない。

「生活上の安全」に不安を覚えている人が13人もいるのが気になる。これを訴えている人たちは安全の確保されない環境で生活しているということだろうか。具体的な内容を確認する必要があるが、うち6人は京阪神在住であり、大きな被害はなかった地域ながら阪神大地震を体験していることと関係があるかもしれない。

### 3-2-3. 情報の入手状況

回答者が「入手困難」と訴えた情報の領域項目を件数の多い順に、滞日年数グループ別に表5に示した。年数の少ないグループは回答数自体多い。日本語面からも、日本でのサポートネットワークの薄さからも情報を入手することの困難さは予想されたことである。さらに、それ以前の問題として、情報というものが入手しようとして得るものであるという考えや、その方法自体に不慣れであるということも考えられる。

領域としては、「就職」と「日本語学習」はせっぱ詰まったニーズである。「年金保険」はこの年齢層の人たちが親世代の面倒をどうみるかに関わる問題であるとともに、遠くない将来の自分たち自身の問題でもある。

「日本語学習」については、国費帰国者でない呼び寄せ家族の場合、施策上の支援が得られにくいことは以前から問題になっている。回答者の日本での日本語学習歴をみると、78人中何らかの形で支援が得られたのは41人(52.6%)に過ぎない(残りの33人中8人は自宅で自習したと答えている)。教室在籍期間を月数で換算すると、在籍者平均では9.1ヶ月、最高で36ヶ月在籍している人も1人いた。中

には教室の指導方法や内容に不満で1ヶ月程度で行かなくなったと答えている人もあったが、この人を除いても月数のレンジ(幅)は非常に大きい。期間を区切ってみても、4ヶ月までで学習をうち切っている人が最も多い。

表9 情報の入手が困難な領域の選択順位(、...はグループ毎の順位)

項目名	7-10年	4-7年	2-4年	0-2年	件	%
1. 就職	0	7	3	16	26	33.3
2. 日本語学習	0	6	5	11	22	28.2
3. 年金保険	0	5	4	9	18	23.1
4. 時事(国内、中国ニュース)	0	3	5	8	11	14.1
5. 健康医療(含: 妊娠、出産)	0	1	2	8		
6. 中国語本やビデオが借りられる施設	0	1	5	4	10	12.8
7. 自分や家族の進学や教育	0	5	1	3	9	11.5
8. 個人的な悩み相談の機会	0	3	0	5	8	10.3
9. 法律手続き(家族呼び寄せ、帰化、結婚等)	0	2	0	5	7	9.0
10. 日本人や外国人との交流の機会	0	1	2	4		
11. 子供の養育(例: 保育園探し等)	0	3	1	3		
12. 住宅	0	1	0	6		
13. 帰国者を支援する民間団体	0	2	0	3	5	6.4
14. 消費生活	0	3	1	1		
15. 帰国者や中国人との交流の機会	0	0	2	2	4	5.1

「余暇娯楽」は選択件数0であった。

呼び寄せ家族全体としては、どのくらいの割合の人たちが国費帰国者に保障されている1年間の日本語学習支援を受けられているのかは詳しく調べる必要があるだろう(国費帰国者でも、1年間の学習期間が保障されているわけではなく、それについては別に取り上げるべき問題であるが)。問題とすべきは期間だけではない。毎日5時間で4ヶ月の研修と1週間に1回で4ヶ月というのとでは、質量ともに大きく異なる。また、自分の学習適性に合った支援の得られるマンツーマン教室の週1回と、学習適性に合わないクラスで過ごす4ヶ月を単純に時間数で比べることも不適当だろう。自費・国費を問わず、定住者への支援として望ましい

形態を模索していくことは今後の課題である。

表10 日本語教室在籍期間

在籍月数	7-10年	4-7年	2-4年	0-2年	件	%
0-4ヶ月まで	0	0	4	9	13	31.7
5-8月	0	5	1	3	9	22.0
9-12月	0	4	0	5	9	22.0
13-18月	0	2	1	4	7	17.1
19-24月	0	1	0	1	2	4.9
25-36月	0	0	1	0	1	2.4
計	0	12/23	7/17	22/36	41	52.6

「健康医療」情報へのニーズも比較的高い。妊娠出産に関する情報が求められている可能性がある。この他、「時事」については修了生の調査結果を参照されたい。

### 3-2-4. 家庭外での日本語の使用状況

表11 日本語の使用頻度の評価(ほとんどなし:1~ほとんど毎日:5)の平均値

期区分	7-10年	4-7年	2-4年	0-2年	全 体
平均値	/	4.52	5.00	4.34	4.54
最頻値(人数)	5(2)	5(18)	5(14)	5(24)	5(58,78.4%)
回答件数	2	23	14	35	74

このグループは3人無回答があり、その3人以外は全員「5」であった。

日本語の使用頻度は「ほとんど毎日話す」から「ほとんど話さない」まで5段階尺度で回答してもらった。ただし、これは頻度を問うただけで、深さや広がりには不問であるから、たとえば隣人と毎日の挨拶だけをする人と週に1回いろいろなことを相談する相手がいる人の会話の質の違いを知ることはできない。表11に滞日年数グループ毎の日本語の使用頻度の評価の最頻値と平均値を示す。どのグループも最頻値が「5:ほとんど毎日使う」であるのは修了生の結果と変わらない。

### 3-3. 日本語能力

#### 3-3-1. 日本語の困難度

まず、日本語の会話について困難に感じている度合いの評価(非常に困難:5~全く困っていない:1)結果を分布と平均値でみてみよう。滞日年数の少ないグループほど困難度は高いのは修了生同様、予想された結果である。

表12 日本語会話の困難度評価とグループ別比率%(困難なし~非常に困難まで5段階)

困難は	困難無	殆ど無		少し困難	困難大	計	平均値
7-10年	0	1	0	0	1	2	////
4-7年	2	2	1	13	5	23	3.74
2-4年	0	1	1	8	4	17	4.07
0-2年	0	0	0	12	24	36	4.67
計、%	2	4	2	33	34	75	4.24

では、日本語読み書きの困難度はどうだろうか(表13)。全体としては、会話よりも読み書きを困難に感じる度合いが強い傾向、また来日して日の浅い時期には会話の方を読み書きよりも困難と感じる傾向も修了生の場合と同じ結果である。

表13 読み書きの困難度評価の件数と比率%(困難なし~非常に困難まで5段階)

滞日年数	困難0	殆ど無		少し	大変	計、平均値	会話平均
7-10年	0	0	0	1	1	2	// //
4-7年	1	0	3	16	3	23	3.87
2-4年	0	1	0	9	4	17	4.14
0-2年	0	3	0	15	16	36	4.29
計、%	1	4	3	41	24	73	4.14
会話平均	2	4	2	33	34	75	4.24

#### 3-3-2. 日本語能力の自己評価

「日本語能力の自己評価15項目」のうち、「テレビドラマの会話が聞き取れる」を除いた14項目を使用し(経緯については安場(1997)参照)、論理的に矛盾のある回答(「手紙が書ける」のに「自分の名前住所を書き込めない」など)をした人のデータを除いた残りの67人について、1項目1点として、14項目の合計点の分布を表14に示す。

表14 日本語能力の自己評定点の滞日年数別分布(%はそのグループ内の比率)

	7-10年 %	4-7年 %	2-4年 %	0-2年 %	合計	全体の%
0-5点	2   100	4   22.2	3   21.4	17   51.5	26	38.8
6-11点	0   /	9   50.0	9   64.3	15   45.5	33	49.3
12点-	0   /	5   27.8	2   14.3	1   0.03	8	11.9
件数	2	18	14	33	67	100.0
平均値	/	8.89	8.82	5.76		7.05

全体としては中位(6-11点)群が最も多い左よりの山型分布となった。滞日年数が高い方が高得点者が多いのは頷ける結果である。その中で、滞日期間の最も長い7-10年グループの2人(1989年来日)が2人とも「仮名が読める」と「一人で買い物ができる」の2項目しか選択していないのが気にかかる。この7年間、よほど日本語の習得を促進しない言語環境にあったのではないか。

修了生の全体平均値9.6と比べると2.5ポイント低いのが、これは滞日0-2年の回答者を対象に含めた影響が考えられたため、0-2年の人を除いた平均値を算出してみたが、それでも8.86であった。今回の回答者たちが、より困難を感じているからこそ回答を寄せた可能性がある。

「親しい日本人の有無」は日本人とのサポートネットワーク形成度の一つの指標として取り上げたもので、日本語力との相関は修了生の調査でも確かめられている。呼び寄せ家族についても、2検定で0.001以下の有意確率での関連性が見いだされた。親しい日本人がいることが日本語力の伸長に与る、あるいは日本語力が伸びれば日本人とのサポートネットワークも広がるということはどちらもあり得るだろう。

表15 親しい日本人の有無と日本語力評定点の関連

2値=73.6066(自由度2) 有意確率=0.00001以下 クラメールの関連係数=0.514

日本語点	1-5点	6-11点	12-14点
いない	73.1	36.4	25.0
いる	11.5	57.6	75.0
合計	85%	94%	100%

### 3-4. 学習ニーズ

#### 3-3-1. 技能別

それでは、日本語学習のニーズをみてみよう。まず、技能別に挙げた具体的な項目の選択順位を表16に示す。

表16 技能別にみた日本語学習ニーズ

項目名	4-7年		2-4年		0-2年		件	% 全体
	23件中、%		17件中、%		36件中、%			
1. よりスムーズに会話する	18   78.3	11   64.7	29   80.6	58	74.4			
2. 発音をもう少し日本人に聞き取りやすくする	6   26.1	5   29.4	17   47.2	28	35.9			
3. 相手によって丁寧さ(敬語等)を使い分ける	12   52.2	5   29.4	9   25.0	26	33.3			
4. 文法の知識を増やす	10   43.5	2   11.8	13   36.1	25	32.1			
5. 使える語彙や文型を増やす	5   21.7	6   35.3	9   25.0	20	25.6			
6. 漢字や片仮名を書いたり、読んだりする。	3   13.0	6   35.3	8   22.2	17	21.8			
7. お知らせや新聞/雑誌を読む	1   4.3	2   11.8	6   16.7	9	11.5			
7. 手紙や作文を書く。	4   17.4	3   17.6	2   5.6		0.0			
9. 車内放送やテレビ番組を聞き取る。	1   4.3	1   5.9	1   2.8	3	3.8			
10. 方言				0				

7-10年グループの2人はこの項目は無回答である。

1位と2位の間、5位と6位の項目の間の選択件数の差が非常に大きく、「スムーズに会話する」ことへのニーズが圧倒的に強いこと、1~5位の項目のニーズがそれ以外のものに比べて強く意識されていることが窺える。実は2~5位の項目も、広くはスムーズな会話のために必要となる項目であると言える。このあたりの結果は修了生の調査結果と同様になっている。

漢字や片仮名の読み書きのニーズを持つ人が全体として予想外に多いのは、滞日0-2年の回答者(全体の46%)が含まれるためと考えられる。7位の2項目も読み書きに関わるものであるが、後述する読み書きの節で詳しく触れる。

### 3-3-2. 場面別ニーズ

次に場面別のニーズをみる(表17)。滞日年数グループ毎の回答件数に差があり、かつ2-4年グループはグループ全体の回答数が少ないため、件数の比較にはあまり意味がない。そこで、以下の調査結果ではグループ毎の件数の順位を付した。

表17 場面別ニーズの選択件数順位( ...は滞日年数グループ毎の順位)

項目名	4-7	2-4	0-2	件	%
1. 加ワ: 病院や保健所で医師と	5	3	16	24	30.8
2. 加ワ: 仕事(例: 指示を受ける、電話を受ける、失敗等の処理)	4	4	13	21	26.9
3. 加ワ: 職場・近隣・学校で、意思の疎通上の問題が生じた時(例: 苦情を言われた時、苦情を言いたい時、交渉の仕方がわからない時など)の解決の仕方	8	4	7	19	24.4
4. 加ワ: 職安や就職面接	1	2	14	17	21.8
5. 加ワ: 緊急時(例: 火事、事故、急病等)	4	2	7	13	16.7
6. 加ワ: 商店や郵便局などで買い物する時	2	4	5	11	14.1
加ワ: 電車やバス等を利用する時	2	4	5		
8. ミナ: 進路に関する情報の読みとりや入試の小論文の作成	3	2	5	10	12.8
加ワ: 進路(進学就職)に関する問い合わせや相談	3	2	5		
ミナ: 職訓校や夜間中学等の授業の聞取りや教科書の読取り	3	2	5		
11. 加ワ: 役場や入管で	4	3	1	8	10.3
12. ミナ: 回覧板、お知らせ、広告等の読みとり	2	2	3	7	9.0
加ワ: 近所の人や職場の人等との雑談やつきあい	2	2	3		
加ワ: 知人との複雑な会話(悩み相談や将来の夢等)	4	2	1		
15. 加ワ: 電話で	2	1	3	6	7.7
16. 加ワ: 銀行や郵便局での貯金や送金などについて	1	2	2	5	6.4
ミナ: 仕事に必要な書類の読みとりや記入・作成	1	3	1		
加ワ: 子供の学校、幼稚園、保育園での先生と	0	2	3		
19. 加ワ: 子供や配偶者との複雑な会話(説教、相談等)	3	1	0	4	5.1
ミナ: 挨拶の手紙やハガキなどの読み書き	3	1	0		
21. ミナ: 役場や病院、銀行等の書類の読みとりと記入	0	0	1	1	1.3
加ワ: 不動産屋で(例: アパートを借りる時等の会話)	0	1	0		

最も多いのは病院や保健所での医師との会話、そして職場での会話ニーズである。特に滞日年数の少ないグループのニーズが高い。買い物や電車バスの利用、緊急時など、サバイバルレベルと言える会話ニーズが高いのは、やはり滞日0-2年の回答者の占める割合が高いためと考えられる。このグループの選択件数を除く

と、この2場面の選択件数の全体での比率は7.7%に下がる。

就職面接場面の会話ニーズも同様に、0-2年グループのニーズが高い。逆に「職場等での意思の疎通上の問題が生じたとき」のニーズは滞日年数の多いグループで高い。滞日期間の長くなるにつれてニーズが移り変わっていくことが示されている。

### 3-3-3. 日本語以外の分野の学習ニーズ

表18は日本語以外の分野に関する学習ニーズの調査結果である。「日本の生活習慣」、「より高度な専門知識・技術」の習得を望む人は滞日年数に関わらず多い。差が出たのは0-2年グループで第2位の「職場事情」が他グループで比較的順位が低く、「文化習慣の異なる地での適応」についてのニーズが0-2年グループではまったく選と選択されなかったことで、それぞれ今回の対象者の滞日年数によるニーズの推移を窺わせる結果となっている。

表18 日本語以外の分野の学習ニーズ( ...は滞日年数グループ毎の順位)

項目名	4-7年	2-4年	0-2年	件	%
1. 日本の生活習慣やマナーについての知識	6	9	19	34	43.6
2. 職業上あるいは学問上のより高度な専門知識、技術(パソコン、ワープロ、外国語等を含む)	4	6	10	20	25.6
3. 日本の職場事情についての知識	4	2	14		
4. 日本人のコミュニケーションパターン(例: 相手に対して何かを主張する時や断る時等の伝え方)	4	0	10	14	17.9
5. 日本の学校生活や教育についての知識	5	3	3	11	14.1
6. 日本社会や国際社会についての知識(例えば政治経済等)	4	2	2	8	10.3
7. 文化習慣等の異なる地で適応していく場合の姿勢やストレスへの対処時、中国の習慣に従うか日本の習慣に従う或いはそれ以外の方法をとるか等、日本の生活に対する姿勢)	4	4	0		
8. 基礎的な学力(小学校中学校で学ぶ読み書き力や計算能力)	3	2	2	7	9.0

7-10年グループは無回答。

### 3-3-4. 日本語学習の目的

日本語学習の目的について表19に示した。現在の生活上の困難を軽減することを目的とする人が多い。特に、滞日0-2年の人でこの項を選択した人はこのグループ全体の44%になるが、同じ1位でも7-10年グループでは7/23で、30%にとどまっ

ている。

表19 日本語学習目的の選択件数順位( ...は同一滞日年数グループ内での順位)

項目名	7-10年	4-7年	2-4年	件	%
1.現在の生活で日本語力不足のため困ることが多いため (含む:職の維持、学校の勉強についていく)	7	2	16	25	32.1
2.今より生活レベルを上げるため(車の免許や職業に関する 資格の取得や職訓校への入校等、より良い就職、待遇を得 る)	4	4	6	14	17.9
3.近隣や地域社会の日本人あるいは親戚の日本人とより 深くつきあうため	2	3	3	8	10.3
4.日本事情や一般教養を得るため	3	2	2	7	9.0
5.孫や子等家族と日本語でしっかりコミュニケーションする 6.進学のため	2	1	0	3	3.8
7.余暇・娯楽に必要な日本語(例:お札、テレビ、公民館のサ ークル活動を楽しむ等)のため	0	0	3		
	2	1	0		

### 3-3-5. 学習環境

しかし、学習ニーズはあっても、さまざまな理由で学習行動に至らない人も多い。現在日本語を勉強していないという54人にその理由を尋ねた(表20)。

修了生の結果と同様、「仕事が忙しい」が最も多い理由であった。しかし、さすがに高齢者を含まない呼び寄せ家族では「記憶力の衰え」を挙げた人は少ない。また、修了生の結果と異なるのは「現在の日本語力で特に困らない」、と答えた人がいなかったことである。このことも日本語学習ニーズのある人が回答を寄せたということの傍証となるだろう。

「付近に教室がない」から、という人が13人いるが、これも修了生の結果同様、教室というリソースの欠乏ではなく、探し方を知らないでそう思っている人が含まれている可能性がある。事実、この調査結果を踏まえて日本語教室の情報がほしいという人たちに付近の日本語教室の資料を郵送したが、そのような教室のあつことを知らなかった人が何人かいた(馬場、1998)。

しかし、「教室のあることはわかったが、やはり仕事が忙しくて行けない」という人も少なくなかった。理由の第2位の「教室はあるが、時間帯が合わない」(29.6%)という理由も同根であろう。「学習ニーズがあっても時間のない」という人たちに応えられる学習支援サービスのあり方という視点で、既存の帰国者援護施策を再考する必要が痛感される。

表20 日本語を学習していない理由

項目名	4-7	2-4	0-2	件	%
1.仕事が忙しくて時間がない	10	9	16	35	64.8
2.学校・教室はあるが、時間帯が合わない	6	3	7	16	29.6
3.付近に学習できる日本語学校・教室がない	4	2	7	13	24.1
4.学校・教室はあるが、学習レベルや内容・方法が合わない	2	2	6	10	18.5
5.学習の必要は感じるが、記憶力が衰えた	2	2	5	9	16.7
6.現在の日本語力で困ることもあるが、自然の上達まかせ	2	5	0	7	13.0
7.学費や教材費が高い	1	2	2	5	9.3
8.家族の介護や世話がある	0	0	4	4	7.4
通学に要する交通費が高い	2	0	2		
10.知っている人がいないので一人では行きにくい	0	0	3	3	5.6
11.家事が忙しくて時間がない	0	1	1	2	3.7
12.どこで学習できるか情報が入手できない	0	0	1	1	1.9
教室でみんなと一斉に学習するには不慣れ	0	0	1		

「現在の日本語力で特に困らない」、「学習の必要は感じるが、身体の事情が許さない」、「家族から反 対されている」、「教室の先生や生徒と合わない」はそれぞれ0件だった。また、7-10年の人はこの問いにも 無回答であった。

### 3-3-6. 学習条件

では、回答者はどのような形態・方法の学習なら参加可能と考えているのだろうか(表21)。

全体としては一斉授業のニーズが最も多かったが、中でも滞日0-2年の人のニーズが高い。滞日年数の長いグループに比べて「教室へ出かけていく負担をおしても学習しなければ」という緊急性の高さや、学習と言えば教室でやるものというピリーフの存在するためと思われる。しかし、実際には仕事等で忙しく、教室に通うのが困難である人が多い人たちである。放送講座を望む声も高い(テレビ講座についての考察は、安場他(1997)の修了生の調査結果報告を参照されたい)。「適当な教材があれば、独習する」という人も少なくない。これは回答者全体としての学歴の高さから、自学技術を身につけている人が多いためと推察される。



表21 希望の学習形態・方法( ...はグループ内の順位)

希望の学習形態	4-7年	2-4年	0-2年	件	%
1. 教室で一斉授業を受ける	6	2	15	23	29.5
2. 先生から1対1で学ぶ	8	4	8	20	25.6
3. テレビやラジオの日本語講座で学ぶ	5	5	9	19	24.4
4. 適当な教材があれば、独習する	3	7	6	16	20.5
5. 適当な教材があれば、独習するが、わからない時は先生に電話や手紙で質問に答えてもらう	3	3	5	11	14.1
5. 学校から郵送されてくる教材を使って家庭学習し、これを先生に返送して添削してもらう	1	3	7		
7. 2～3人のグループに分かれて学ぶ	5	2	3	10	12.8
7. 適当な教材があれば独習するが、わからない時は付近の日本語教室等に行き先生に質問する	3	0	7		

### 3-5. 日本社会への要望

最後に、「日本社会に理解を望むことがら」についての回答を取り上げる。

表22 日本社会に理解を望む項目の選択件数順位

項目	7-10	4-7	2-4	0-2	件数	%
1. 帰国者の生まれた歴史的背景	1	6	10	16	33	42.3
2. 日本での帰国者の立場・実態	0	5	1	8	14	17.9
3. 価値観や生活習慣の違う人とのつきあい方	0	4	3	6	13	16.7
4. 日本語の分からない人とのコミュニケーションの方法、工夫	0	3	2	7	12	15.4
日本での帰国者援護制度	0	4	6	2		
6. 中国事情	0	2	0	4	6	7.7
日本語の教え方	0	1	0	5		
8. 帰国者の中国での生活	1	1	1	1	4	5.1
9. 特に必要は感じない	0	1	1	1	3	3.8
その他	0	0	1	2		
11. 中国語	0	1	0	1	2	2.6

この問いへの回答者数は47人(60.3%)で、修了生の調査結果68.0%と比べると若干少ないが、項目順位の傾向はおおむね一致している。やはり「帰国者の生まれた歴史的背景」への理解を求める声が高い。「その他」は、「帰国者をもっと尊重してほしい」「日本人の価値観をおしつけないでほしい」「中国人の「自強心」を知っ

てほしい」で、第3位の「価値観や生活習慣の違う人との付き合い方」のバリエーションと言えるだろう。

### 5. 結論と今後の課題

今回の呼び寄せ家族への調査を通して明らかになった今後の課題は、次のようになる。なお、修了生の調査結果と重複するものは簡単に記述するのみとしたので、これについては安場他(1997)を参照されたい。

1 自費来日の呼び寄せ家族の日本語習得をはじめとする支援については、彼らの生活サイクルを考慮に入れた支援システムを考える必要があること

「日本語教室在籍期間」の項で触れたように、形態や期間一つとってみても、希望者が実際にその支援を享受できるものでなくては意味がない。自費帰国者の人にも国費帰国者並みの援護策を追求するのが筋であるにしても現実的な実行可能性はどうか、あるいはすでに定住している国費帰国者の長期的支援策と同様に考えていくのがより実行がしやすい問題であるか、など課題は多い。

「勉強はしたいが時間がない」という人が多いことをまず考慮すべきであろう。国費自費を問わず、支援システムは何よりも生活者である彼らの限られている時間の中で可能なものでなければならない。

#### 2 情報の入手

国費帰国者と比べて、自費帰国者は公的な支援を受けられる度合いが低いことが多い。であれば、なおさら、在住外国人向けに自治体が提供しているサービスについての情報なども自身で求めていかなければならなくなる。詳しい実態調査を経て改善されるべき問題だろう。

#### 3 来日間もない呼び寄せ家族の日本語学習ニーズの緊急性

これは改めて言うまでもないことであろう。サバイバルレベルの日本語が習得されていない段階で日本社会に突入していかなければならない人も含まれる呼び寄せ家族にとって、日本語学習へのニーズは緊急かつ最も高い優先順位に置かれているものである。

#### 4 滞日期間によるニーズの推移

生活上のニーズも日本語学習の中の細かいニーズも、日本での生活期間に応じて移り変わってきている。それぞれに応じた支援が望まれている。

5 全体的なニーズ把握のためには、郵送式の質問紙調査は限界があること  
今回の調査では差し迫った顕在的ニーズのある人や質問紙に回答する余裕のある人の回答が得られ、その傾向を掴むことはある程度できた。しかし、それ以外の、回答している時間的な余裕のない人や、学習の可能性を諦めてしまっている人たち、さらに質問紙法に不慣れな人たちの潜在的ニーズを把握することはこの方法ではできない。

本格的な定住者支援時代に向けて、自費帰国の呼び寄せ家族のニーズが示唆するものは小さくない。実践を通してのニーズに応えるための模索を続けていくことが必要である。

#### 《参考・引用文献》

馬場尚子(1998)「実践報告：学習希望者への情報提供の試み」、『中国帰国者定着促進センター紀要』第6号。

安場淳、馬場尚子、平城真規子(1997)「定住している中国帰国者の日本語学習ニーズ等」についての調査報告 - その1」、『中国帰国者定着促進センター紀要』第5号。

安場淳(1997)「生活者のための簡便な「日本語能力の評定表」開発のために」、『中国帰国者定着促進センター紀要』第5号。